

日本語と英語における否定の接頭辞の比較研究

A comparative study of negative prefixes in Japanese and English

姫 田 慎 也
HIMEDA Shinya

キーワード

[語形成] word formation・[否定の接頭辞] negative prefix・[派生語] derivative
[階段的性] gradability・[接辞] affix

1. はじめに

本稿では日本語と英語の否定の意味をもつ接頭辞を比較する。日本語においても英語においても否定の意味をもつ接頭辞は数種類存在し、それぞれが否定の意味を持つものの、それぞれが特有の性質をもつ。一般的に、否定の意味の接頭辞が付与することによってできた派生語と付与される前の語（基体）とは反意語関係になることが多い。(1)はそれぞれが反意語関係である。

- (1) a. happy – unhappy
b. possible – impossible
c. 可能 – 不可能
d. 公開 – 非公開

日本語の否定の意味の接頭辞においては、接頭辞を付与するだけで語彙化により単純に反意語関係とならない例や基体と派生語に同じ接尾辞がつかない例、派生語と基体が反意語関係になる場合、基体に別の接頭辞を付与しなければならない例、基体が形態素のため独立した語彙として存在しない例等、反意語関係になるための派生方法が一様でない。

英語の否定の意味の接頭辞においては、接頭辞を付与するだけで反意語関係になることが日本語の例に比べて多いが、品詞による派生制限や接辞のクラスⅠ、クラスⅡといった分類等による語形成規則が存在する。

また、日本語と英語の反意語のペアの意味を段階性の観点から中間的部分の存在の有無についても考察する。

2. 日本語の否定の接頭辞

本稿では日本語の否定の意味の接頭辞として、「非」、「無」、「不」、「未」を比較する。英語の否定の接頭辞のほとんどは、形容詞に付与し派生形容詞を形成する。一方、日本語の否定の意味の接頭辞の場合、ほとんどが漢語に付与し派生名詞を形成する。英語の否定の接頭辞付与による派生語と付与する前の語（基体）との関係は多くの場合、反意語関係となるが、日本語の否定の意味を持つ接頭辞付与による派生語と基体との関係は反意語関係にならない例が多数存在する。

また、英語の否定の接頭辞は語彙として単独で使用されることはないが、いくつかの日本語の否定の意味の接頭辞は単独の語彙として存在する。

- (1) a. こちらに非がある。
- b. 心が無になる。

2.1. 接頭辞「不」

接頭辞「不」が付与した派生名詞と基体である名詞とは(2)のように反意語関係である例が多い。

- (2) 不得意—得意、不公平—公平、不可能—可能、不完全—完全、不自然—自然

接頭辞「不」には形態素付与の例が存在し、接頭辞「不」が付与する前の形態素が語として存在しない、あるいはまったく別の意味になる例がある。

- (3) a. 不発—発、不足—足、不沈—沈、不定—定、不届き—届き
- b. 不備—備、不燃—燃、不快—快、不要—要、不況—況

しかし(3)b.の場合、別の語を付与することで反意語として存在する。

- (4) 不備—完備、不燃—可燃、不快—愉快、不要—必要、不況—好況

接頭辞「不」付与の派生形容詞の場合、(5)は反意語が同じ接尾辞「な」であるが、(6)は接尾辞が異なり接尾辞の種類も多様である。

- (5) 不得意な—得意な、不公平な—公平な、不可能な—可能な、不完全な—完全な、不自然な—自然な
- (6) 不釣り合いな—釣り合いの、不馴れな—馴れた、不利益な—利益のある、不規則な—規則的な、不安定な—安定した

2.2. 接頭辞「非」

(7)は接頭辞「不」と同様、接頭辞「非」が付与した派生名詞と基体である名詞とが反意語関係になる例。

- (7) 非課税—課税、非金属—金属、非公開—公開、非公式—公式、非売品—売品

接頭辞「非」が付与した派生名詞と語彙として存在するものの接頭辞「非」が付与する前の名詞とが反意語関係にならない例が存在する。(8)は反意語関係とは同定できない。

- (8) 非国民—国民、非核—核、非番—番、非運—運

接頭辞「非」にも形態素付与の例が存在し、接頭辞「非」が付与する前の形態素が語として存在しない、あるいはまったく別の意味になる例がある。

- (9) 非行—行、非凡—凡、非情—情、

しかし、(9)に別の語彙を付与すると反意語関係になる。

- (10) 非行—善行、非凡—平凡、非情—有情

2.3. 接頭辞「無」

接頭辞「無」は「不器用な—器用な」といった否定の意味を持つ例もあるが、他の否定の接頭辞と違い、「～がない」という意味を多く含むため接頭辞「無」付与の多くの派生語は、否定の意味の接頭辞付与によるものとは同定できない。

接頭辞「無」付与の派生名詞を形容詞にする場合、語尾に「な」や「の」を付与し、派生名詞になる前の名詞の語尾に「のある」を付与すれば多くの場合、(11)のような反意語関係になる。

- (11) 無意味な—意味のある、無関係な—関係のある、無意識な—意識のある、
無資格の—資格のある、無期限の—期限のある

接頭辞「無」には形態素付与の派生名詞も多く、その場合、反意語は接頭辞「有」が付与の派生名詞の例が多い。

- (12) 無害—有害、無機物—有機物、無給—有給、無効—有効、無罪—有罪

2.4. 接頭辞「未」

接頭辞「未」は単に否定の意味を表すのではなく、意味的に動詞派生の形容詞に付与する英語の接頭辞un-と同様、基体がまだ行われていないという意味を含む。

(13)は接頭辞「未」付与の派生語と基体の名詞とが反意語関係になる例。

(13) 未完成—完成、未成年—成年

(14)のように接頭辞「未」は形態素に付与する例が多い。基体となる形態素は語として存在しない、あるいはまったく別の意味になる。

(14) 未開—開、未然—然、未踏—踏、未明—明、未納—納

(15)のように、接頭辞「未」付与の派生語と基体の形態素に別の接頭辞を付与することで反意語関係になることがある。

(15) 未決—既決、未婚—既婚、未熟—完熟

日本語の否定の接頭辞の共通点として形態素付与の例が見られ、それぞれの形態素に別の接頭辞を付与することで反意語関係になる例が存在する。接頭辞「非」に関しては語彙化によって基体の単純な否定の意味ではなく違った意味になる例が存在する。「不」や「無」の例のように反意語として存在しても基体の語尾が同一でない場合もある。言葉は意味も活用も他の言葉と同一であれば存在理由がなくなるため、これらの接頭辞もお互いにわずかに違ったものであるため現存するものだと考えられる。

3. 英語の否定の接頭辞

英語の否定の接頭辞として5種類の接頭辞(a-, dis-, in-, non-, un-)があり、接頭辞a-付与による派生語は他の接頭辞に比べて数が極端に少ない。また接頭辞non-は接頭辞の中でも極めて生産的であり、付与してできた派生語の意味の規則性が高いため実際の語彙数に比べて辞書記載例が極端に少ない。派生語の種類が少ない接頭辞a-と実在する語彙数と、派生語が辞書に記載されることの少ない接頭辞non-は本稿では研究の対象外とし、接頭辞un-, in-, dis-を扱う。

英語の否定の接頭辞による派生語と基体とが反意語関係である例は多く、日本語の否定の意味の接頭辞に比べて意味的に透明度（規則性）が高いといえる。

英語の接辞はAllen (1978) やSiegel (1974) らによって2つのクラスに分けられ、それに基づく語形成規則が存在する。また、日本語の「無」や「非」とは異なり、英語の否定の接頭辞は接頭辞そのものが語彙として使用できない。

3.1. 接頭辞un-

接頭辞un-は辞書記載の派生語数がWebster's Collegiate Thesaurus (1976) では786語と一番多く、生産的な接頭辞である。(1)は反意語関係を示す。

- (1) unhappy – happy, unkind – kind, unlucky – lucky

(2)のように、接頭辞un-は動詞派生の形容詞にも多く付与するため、より生産的な接頭辞だといえる。

- (2) married→unmarried, employed→unemployed, failing→unfailing,
believing→unbelieving

ただし、否定の接頭辞としてはun-は動詞には付与しない。

- (3) *unmarry, *unemploy, *unfail, *unbelieve

接頭辞un-はクラスⅡ接辞であるため、クラスⅠ及びクラスⅡ接辞付与の派生語に比較的自由に付与できる。(4)a.はクラスⅡ接尾辞、(4)b.はクラスⅠ接尾辞付与の例。

- (4) a. [[un[happy]]ness]
b. [un[[employ]ed]]

また接頭辞un-は単に否定の意味を持つだけでなく、日本語の「未」と同じようにまだ行われていない事項の意味も持つ。

- (5) an unmarried couple ('a couple which has not been married')

接頭辞un-は否定の意味だけでなく逆転・欠如の意味の接頭辞も存在し、この場合、(6)のように派生動詞が存在する。

- (6) unwrap, unmask, unseat, unship, unveil

(6)が過去形や過去分詞になった場合、形の上では(4)b.のような否定の接頭辞un-付与による派生形容詞と区別がつかないが、意味的には全く異なる。

- (7) the unpacked baggage ('the baggage which has been packed')

3.2. 接頭辞in-

接頭辞un-に次ぐ派生語数であるが、クラス I 接辞であるため生産性に劣る。Webster's Collegiate Thesaurus (1976) では409語の記載が確認できた。さらに接頭辞un-と同様、ほとんどが形容詞付与であるが、動詞派生の形容詞には付与せず、また派生動詞を形成することがない。(8)は反意語関係の例。

(8) infinite – finite, infamous – famous, invisible – visible

(9)のように、接頭辞in-はクラス I 接辞の特徴として同化が確認できる。

(9) in + possible → impossible, in + regular → irregular, in + legal → illegal

接頭辞in-はクラス I 接辞であるため、クラス I 接尾辞による派生語にしか付与できず、クラス II 接尾辞による派生形容詞に付与できない。したがって(10)a.は可能だが(10)b.は不可である。

- (10) a. [in[[possible]ity]]
b. * [in[[friend]ly]]

否定の接頭辞の中で唯一、接頭辞in-は語よりも小さい形態素に付与できる。

(11) in + ert → inert, in + sipid → insipid

竝木 (1985) によると接頭辞in-は他の否定の接頭辞と異なり、もともとの語の意味の否定ではなく別の意味が加わることがある。(12)はかなりの語彙化が見られる。

(12) innocuous (面白くない), infamous (悪名高い), invaluable (評価できないほど貴重な)

3.3. 接頭辞dis-

接頭辞un-や接頭辞in-と比較して派生語数がWebster's Collegiate Thesaurus (1976) では99語と少ないため全く生産的な接辞ではないが、派生形容詞以外にも接頭辞dis-はWebster's Collegiate Thesaurus (1976) において名詞付与の例が99語中33例見られ、接頭辞dis-は派生動詞も存在するため順応性に優れている。

- (13) a. 派生形容詞: disloyal, dishonest
b. 派生名詞: disunion, disconnect
c. 派生動詞: disregard, disbelieve

クラス I 接辞であるが、接頭辞in-とは異なり、形容詞以外にも付与でき、否定の意味だけで

なく逆転・欠如の意味も持つ。そのため接頭辞dis-には生産性の高い接頭辞の要素があるが、現在のところ接頭辞dis-の派生語の数はクラスⅡ接辞の接頭辞un-や同じクラスⅠ接辞の接頭辞in-の派生語の数に比べてはるかに少ない。

4. 段階性による考察

形容詞は段階的形容詞と非段階的形容詞の2種類に分けられる。まず英語において、happy-unhappyやhonest-dishonestの反意語のペアは段階的形容詞であり、immortal - mortalやmarried-unmarriedの反意語のペアは非段階的形容詞のペアである。段階的形容詞と非段階形容詞においては、その意味領域における性質が全く異なる。

段階的形容詞のhappy-unhappyやhonest-dishonestに対して、非段階的形容詞のimmortal - mortal やmarried-unmarriedには意味領域において中間的な部分が存在しない。例えば、happy-unhappyやhonest-dishonestの関係においては、意味領域には中間的な位置関係が成立し、例えば、happyでなければunhappy、honestでなければdishonestという意味にはならず、(1)のようなneither happy nor unhappyやneither honest nor dishonestという表現も可能である。

- (1) a. He is neither happy nor unhappy.
b. He is neither honest nor dishonest.

(1)の関係が容認可能なのは、happy-unhappyやhonest-dishonestの意味領域には段階性があるため、中間的 (neutral) な部分が存在するからである。

しかし、immortal - mortal やmarried-unmarriedは非段階的形容詞であり、中間的部分が存在しないため、(2)を容認することが難しい。

- (2) a. ? He is neither mortal nor immortal.
b. ? He is neither married nor unmarried.

このように段階的形容詞と非段階的形容詞とで英語の反意語のペアを区別できる。同様に日本語の反意語のペアにおいても段階性の観点から分類できる。派生名詞が多い日本語の例でも英語と違って形容詞でなくても英語と同じように区別できる。(3)は中間的部分が容認できるので、段階性があると想定される。

- (3) a. 彼は幸せでも不幸せでもない。
b. 非凡でも平凡でもない生活。

(4)は中間的部分がない非段階的な例で容認することは難しいと思われる。

- (4) a. ? 判決は無罪でも有罪でもなかった。
b. ? これは非課税でも課税でもない。

段階性においては、英語も日本語も段階的な例と不段階的な例の両方が存在するという点で共通点が確認できる。

5. 結語

本稿では日本語と英語の否定の意味のそれぞれの接頭辞の分析を行ない、英語の否定の意味の接頭辞よりも日本語の否定の意味の接頭辞の方が意味的にも語形成規則的にも複雑であることが判明した。

日本語の否定の意味の接頭辞は語彙化により基体と反意語関係とならない例、基体とは接尾辞が異なる例、基体と反意語関係になる場合、基体に別の接頭辞を付与しなければならない例、形態素が基体である例が多く存在する等、派生方法が多様である。

英語の否定の意味の接頭辞においては基体に接頭辞を付与するだけで反意語関係になることが多いが、品詞や接辞のクラスによる語形成規則が存在し、数は少ないが接頭辞in-においては形態素付与や語彙化が認められる例もある。

また日本語と英語の反意語のペアの意味の段階性の観点では中間的部分の存在の有無が日本語と英語に共通する。

日本語においても英語においても同じ言語内でありながら意味的に類似する数種類の異なる接辞が存在するが、それぞれの接辞は意味的に似ていても一様でなく、語形成規則においてもそれぞれが独自の規則を持つ。そのため、どの接辞も現時点で消滅することなく使用されているものと想定される。

辞書

岩波書店『広辞苑 第六版』(2008)

小学館『現在国語例解辞典 第三版』(2003)

研究社『リーダーズ英和辞典 第二版』(1999)

大修館『ジーニアス英和辞典 第4版』(2006)

Longman Dictionary of Contemporary English, third edn. (1995)

Webster's Collegiate Thesaurus (1976)

参考文献

Adams, V. 1973. *An Introduction to Modern English Word-formation*. London: Longman.

Allen, M. 1978. *Morphological Investigations*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.

荒木一雄・安井稔. 1992. 『現代英文法辞典』三省堂.

Aronoff, M. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. MA: MIT Press.

Bauer, L. 1983. *English Word-formation*. Cambridge: Cambridge University Press.

姫田慎也. 2000. 「否定の接頭辞の生産性」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第22集(龍谷大学仏教文化研究所). 75-83.

_____. 2003. 「身体表現に関する日英語比較研究」『龍谷大学国際センター研究年報』第12

号（龍谷大学国際センター）.73-87.

_____. 2010.「接尾辞-fulと接尾辞-lessの派生形容詞について」『英語英米文学研究』第38号（龍谷大学大学院英語英米文学会）. 37-46.

Horn, L.R. 1989. *A Natural History of Negation*. Chicago: Chicago University Press.

伊藤たかね・杉岡洋子.2002.『語の仕組みと語形成』（英語学モノグラフシリーズ）研究社.

影山太郎.1999.『形態論と意味』くろしお出版.

影山太郎・由本陽子.1997.『語形成と概念構造』研究社.

小谷晋一郎. 2000.『英語の語彙』（龍谷叢書Ⅳ）龍谷学会.

Marchand, H. 1969. *The categories and types of Present-Day English word-formation*. München: C.H.Beck.

竝木崇康. 1985.『語形成』（新文法選書）大修館.

成田義光・長谷川存古・小谷晋一郎. 1983.『発音・綴り・語形成』（講座学校英文法の基礎）研究社.

大石強. 1988.『形態論』（現代の英語学シリーズ）開拓社.

Quirk,R., S.Greenbaum, G.Leech, and J.Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Randall, J. H. 1985. *Morphological Structure and Language Acquisition*. New York: Garland.

Selkirk,E.O. 1982. *The Syntax of Words*. Cambridge, MA:MIT Press.

Siegel, D. 1974. *Topics in English Morphology*. Ph.D. dissertation, MIT.

Spencer, A. 1991. *Morphological Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.

米山三明・加賀信広. 2001.『語の意味と意味役割』（英語学モノグラフシリーズ17）研究社